

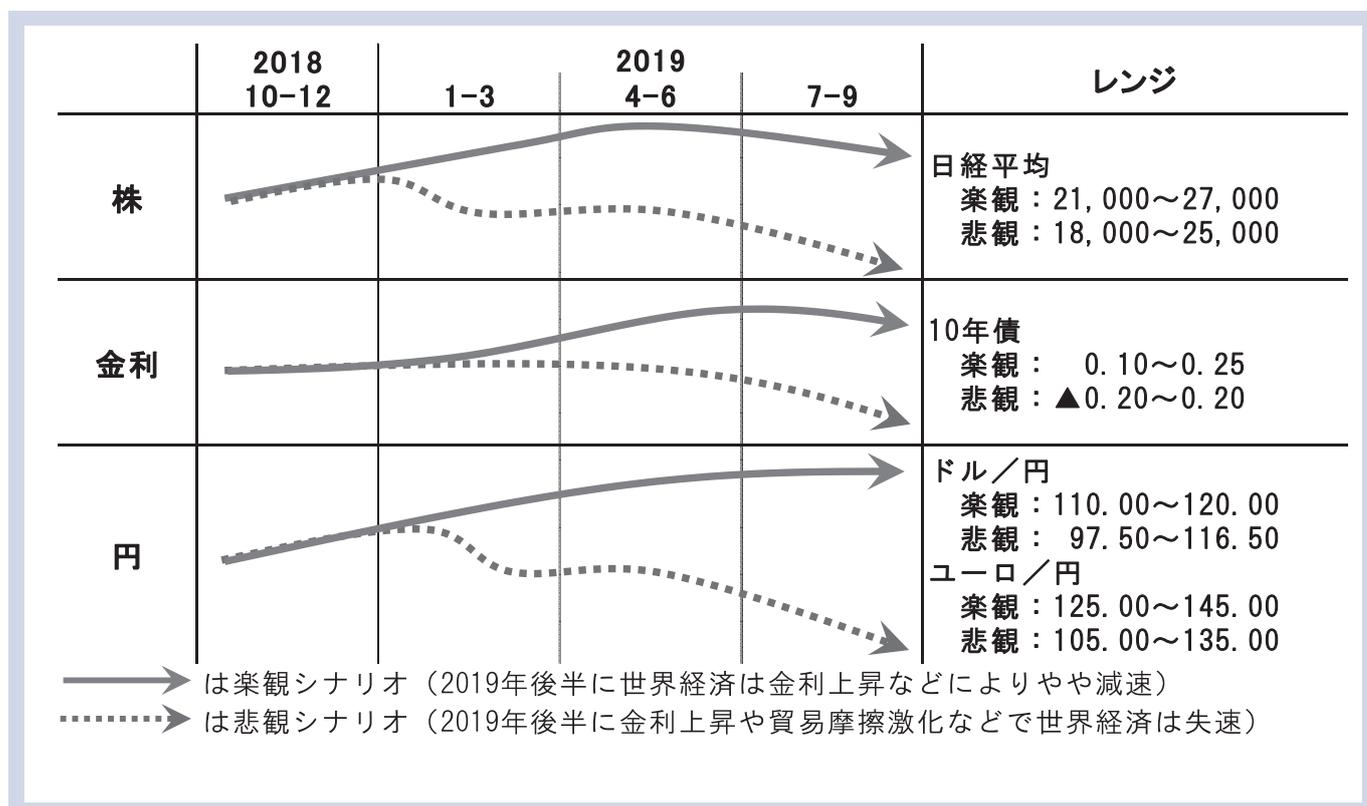
# 各国経済の6ヶ月見通しと向こう1年間の市場予想

(11月7日時点)

## I. 各国経済の6ヶ月見通し

	コメント
① 日本	台風や地震等の自然災害が相次ぎ7-9月期の景気は停滞したが、10-12月期には反動から高い成長が見込まれ、均してみれば緩やかな回復が続くとみられる。一方、足元で輸出に減速感が出ていることが懸念材料。仮に今後、貿易戦争等を背景に海外経済が下振れるようであれば、輸出の悪化を通じて国内景気へ悪影響が及ぶリスクがある。
② 米国	中間選挙の結果、19年からねじれ議会となるため、先行き不透明感が高まり易い。しかし、19年前半の景気は、雇用・所得、資産残高の増加、減税による個人消費の押し上げを背景に、堅調さを維持しよう。また、米中貿易戦争の激化も2国間での関税引上げ合戦であれば悪影響は限定的なものに止まる。堅調な景気拡大、労働市場の逼迫が続く中、FRBIは18年12月、19年3、6月まで利上げを継続すると予想される。
③ 欧州	ユーロ圏経済は、雇用・所得環境の改善が支えとなり、今後も緩やかな成長が持続する公算が大きい。ただ、世界景気の減速や貿易戦争に対する警戒から、輸出企業を中心に業況改善にブレーキが掛かっており、昨年の高成長の再現は難しい。物価の下振れリスクが後退したことを受け、ECBIは12月末で資産買い入れを終了する。
④ アジア・新興国	アジア・新興国経済では、世界景気の自律回復の動きが景気を下支える展開が続く。金融市場は落ち着きを取り戻す一方、米中貿易戦争は中国への依存度が高いアジア・新興国にも影響を与え得るため、今後の行方に引き続き注意が必要である。他方、世界経済の拡大が続けば、輸出依存度が高い新興国景気を下支えすると期待される。

## II. 向こう1年間の市場予想イメージとレンジ



(注)記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません  
レンジについては、前月号から変更した値に下線を引いております。(上方修正:↑ 下方修正:↓)